

紹介

戸祭由美夫著

『絵図にみる幕末の北辺防備』

——五稜郭と城郭・陣屋・台場——

寛政二十一年（一七九九）から文政四年（一八二二）にかけて、また嘉永七年（一八五四）から慶応四年（一八六八）にかけて、江戸幕府は蝦夷地に直轄領を設け、直接その支配や管理に関わった。ロシアを警戒した幕府は箱館（函館）に五稜郭を築き、また東北地方の諸藩には蝦夷地沿岸の「警固」を行わせた。その結果、防御の拠点となる囲郭や陣屋、ならびにそれに類する諸施設が、北海道や南千島、樺太南部に設置されることになった。その一部には、五稜郭に代表されるように、ヨーロッパ的な囲郭の影響を見ることができ、本書は、こうした諸施設を描いた絵図（古地図）に関して、歴史地理学の立場から二〇年近く研究されてきた戸祭由美夫氏（奈良女子大学名誉教授）が、その成果を平易に示されたものである。

対象となった絵図の多くは、現在では公立の図書館や博物館に所蔵されている。もちろん北海道の諸機関が所蔵するものも少なくないが、東北諸藩の史料を受け継いだ東北地方の諸機関が所蔵するものも多い。著者は単独で、あるいは研究グループを組織して、こうした諸機関を一つひとつ訪問し、絵図の書誌学的な調査を積み重ねてこられた。本書では、こうした絵図のうち、およそ六〇点について写真を掲載しており、主な囲郭や陣屋、その他の施設の姿を一覧することができる。

一四章からなる本書は、箱館の亀田役所（五稜郭）に関する第一部（第一章）第七章）と、蝦夷地沿岸の主要な陣屋やそれに類する施設について、個々に検討する第二部（第八章）第四章）から、構成されている。第一部において多くの読者の興味をひくのは、いわゆる五稜郭の外側に役宅と土塁があり、二重囲郭として理解すべきだという指摘であろう。五芒星の形をとる五稜郭をさらに長方形の土塁が囲んでいる姿は、著者がいうように「極めて特異」であり、ヨーロッパの空間的な理念が日本在来のそれと交雑した様子を窺わせてくれる。

一方、第二部では、蝦夷地「警固」とその施設の分布を概観した上で、函館平野（松前藩・盛岡藩・弘前藩）、噴火湾沿岸（盛岡藩）、太平洋沿岸（仙台藩・日本海側（弘前藩・鶴岡藩・秋田藩・会津藩）の諸施設に関して、絵図が検討されている。その多くは規模が小さく、内地の陣屋町のように都市空間として捉えることができるわけではないが、著者は各施設の形態を念に吟味している。また、最後の章では、幕府領の時期に城として再構築された松前城についても採り上げている。

興味深いことに、著者は各章において、現在の景観のなかで囲郭や陣屋などの痕跡を探り、その保全や活用についても提言されている。もちろん、すでに史跡として指定されている例も少なくないが、五稜郭外側の土塁のように、現在では都市空間のなかに溶け込んでしまい、意識して注目しなければ判別できない例もある。北海道の諸都市の歴史空間を理解する上で、本書は新しいヒントを教えることだろう。

（A5判 一三〇頁 古今書院

二〇一八年六月 税別三八〇〇円）

（米家泰作 京都大学准教授）